夏目漱石の漢詩研究
-連作と「断面的文学」という視点から-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-07-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 崔, 雪梅
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20259

2018 年度　教養デザイン研究科

博士学位請求論文（要旨）

夏目漱石の漢詩研究
―連作と「断面的文学」という視点から―

教養デザイン専攻
崔 雪梅

一　本研究の問題意識と目的

博士論文で中心的に扱うのは、夏目漱石の漢詩の二〇八首である。漢詩の分析において、漱石が『文学論』で提示した「断面的文学」という概念に沿いながら考察し、漱石の漢詩観、漢詩創作における特性や理論上の独創的なところを明らかにする。「断面的文学」という概念は『文学論』のほか、漱石の評論、談話、小説にもそれに関連する言説を散見することができる。これまでの漱石の漢詩の注釈・解釈をめぐる研究は、漱石の文学研究に大きな貢献を与えた一方、漱石の漢詩と小説、漢詩と『文学論』の間に互いに絡み合う関連性について依然として明確に解き明かしてはくれない。漱石の漢詩を創作する目的と表現上における新しさは何か。明治から大正にかけて西洋詩や新体詩、英詩漢訳などの詩形が漢詩と併行的に存在する時代状況の中で、漱石は、なぜ「断面的文学」という概念を持ち出して、漢詩を紹介したのか。「断面的文学」をめぐる漱石の理論的研究には、漢詩の伝統を視座に即しながら、文学とはいかなるものか、漢詩とはいかなるものかを解明する試みが表わされている。『文学論』や評論に示された漢詩に関する見解は、漱石が研究者として心理学、哲学の立場に根差して行われた問題追究である。そして、小説の創作における漢詩の挿入と引用、および、漢詩的な表現構造を取り入れた背景には、漱石の漢文学を振興するための意図が込められている。

博士論文では、漱石の漢詩を分析することに当たって、連作と個別作に分けて研究・分析を行う。そのうえ、「断面的文学」という構造が漱石の作品の中でどのような作用を果たしたのかを解明しながら、作品の再解釈の可能性を検討する。

二　本研究の構成ならびに各章の要約

明治四〇年、漱石が『文学論』で提出した「断面的文学」という概念は、一体どのようなものなのか。それは、漱石の漢詩・小説・エッセイ・評論・談話、ないし、南画の中でどのように表現されて、また、どのように言及されたのか。さらに、文学作品において「断面的文学」という構造は、どのような芸術的効果を果たしたのか。博士論文では、このような問題を解決するために、次のような研究と分析とを行う。

まず、「断面的文学」という概念の理論的枠組みと意義を明らかにするため、博士論文は二部に分けて考察を行う。第一部の第一・二章では、漱石の漢詩を前期と後期に分けて、漢詩における「主観的断面」と「客観的断面」という構造と表現効果とを研究・考察をする。そのうえ、ある一定の期間の中に集中的にかつ連続的に創作された作品群を連作として読むときに、「主観的断面」と「客観的断面」は、どのような作用を果たしたのかを解明しながら、作品の再解釈の可能性を追究する。

第一章　前期の漢詩

漱石の前期の漢詩には「主観的断面」という形を以て切々たる帰心や離愁を詠う作品が多く占められてい

る。このような作品では、「家山」・「郷夢」・「故園」などの点景に対する描写を以て若い詩人の煩悩と望郷の情とを淋漓と表現し、詩人の思想と精神上の「故郷」に対する憧れを表わしている。第一章では、この時期の作品を連作として読むことによって、前の「主観的断面」・「客観的断面」に詠われる諸々の出来事が後に来る作品にどのような情報を与え、そして、後に来る作品がどのように前の作品に表現した内容や感情を継承したのかを確認する。このような考察を通して、連作として読む時に、前後の作品間に生じる連係と「断面的文学」という構造との関係性を明らかにしながら、作品の再解釈の可能性を検討する。

第二章　後期の作品

第二章では、漱石の後期の漢詩を絵画期と最晩年の作品について分析している。まず、「断面的文学」の理論的背景を明らかにするために、絵画期の漢詩と南画作品における「断面的文学」という構造がどのような芸術性を果たしたのかを明らかにし、漱石が彫刻、絵画、漢詩に重要視する絵画的な表現形式と「断面的文学」との関連性について考察する。また、連作として読むことによって、「断面的文学」という構造は作品の解釈にどのような可能性を与えられるのかを解明する。そのため、最晩年の作品の分析においては、この時期の作品の中で重複的に表現される「帰臥」というビジョンについて考察を行う。そのうえ、連作として読むときに、「帰臥」にまつわる人物・地理・建築などの景観は連続的に展開するビジョンの中でどのような意味と作用とを表わしているのか明らかにする。

第三章　「詩入」作品と「俳句的小説」

第二部の第三・四・五章では、個別作品という視点を以て漱石の漢詩を分析する。『思ひ出す事など』のように、漱石は多くの作品の中に漢詩を加えている。その中でも、古典的な創作方法を受け継ぎながら、異色な存在となる作品がある。それは、すなわち、「俳句的小説」として創作された『草枕』である。『草枕』は、「詩入」という表現形式を取り入れることにとどまらず、漱石の言う「吾が邦の和歌、俳句若くは漢詩の大部分の如き」の「断面的文学」の表現方法が最大化に活かされた作品でもある。なぜなら、それは「俳句的小説」の「プロットも無ければ、事件の発展もない」といった創作方法に十分に反映されているからである。第三章では、漱石の「詩入」作品における漢詩と小説、または、漢詩とエッセイの関係性について分析し、漢詩が挿入された作品の中で働く作用を解明する。そして、当時の時代背景から「断面的文学」という構造が「俳句的小説」という創作方法にどのような形で関与しているかを考察しながら、その理論の構築に漱石のどのような思いが込められているかを検討する。

第四章　『草枕』における漢詩的な空間構造

『草枕』では、漢詩の挿入や創作方法のほか、その空間描写にも「断面的文学」の構造が仕込まれている。それは、汽車と対立する船に関する漢詩的な空間構造から確認できる。明治から大正にかけて、交通網の敷設により都市空間の構造は加速的に変化すると同時に、当時の時代相、意識、理念などを返照するような小説、詩歌などが多く創作されている。『草枕』では、汽車、路面電車、蒸気船等の交通機関をめぐる表現が登場人物の人物像・物語の時代相・語り手の世界観を物語る装置として働くことにとどまらず、「断面的文学」の構造の中で漢詩的空間を構成している。第四章では、明治期に登場した船、汽車という交通機関に注目し、このような題材が漱石の漢詩の中でどのように表現されているのかを考察する。そして、その意味と作用は、『草枕』の創作とどのような関連性を持っているかを解明し、『草枕』の空間描写における「断面的文学」の構造を明らかにする。

第五章　「古別離」

前掲した律詩や絶句と異なり、漱石の 71 番の「古別離」は、五言古詩という詩形で詠われた「断面的文学」である。明治三二年四月に作られた「古別離」は、張衡の名作「四愁詩」にある言葉を多く引用し、古詩とい

う詩形を以て離別の情を詠っている。「主観的断面」という形で詠われた「古別離」において、「四愁詩」から引用した言葉はどのような意味を表わし、またどのような作用が働いているのか。現に、多く引用・参考されている代表的な注釈書の四冊における「古別離」の訓みくだしや、注釈と現代語訳とを比較してみたところ、それぞれの注釈書には作品と張衡の「四愁詩」との関連性を指摘している。ところが、「四愁詩」の詩文に関する注釈において、それぞれ異なる解釈が見られるのである。そのことにより「古別離」の現代文訳に、どのような影響を与えたのかを考察する。第五章では、先行研究に見られる「金錯刀」「英瓊瑰」「貂襜褕」などの言葉をめぐる異なった解釈と現代語訳について考察し、その原因を解明する。その上、これらの言葉が張衡の「四愁詩」における意味を考察し、「古別離」の本来の内容を明らかにする。

三　考察視点と独創的なところ、本研究の意義と位置づけ

漱石の二〇八首の漢詩の中で、多くの作品はある一定の期間の中で、集中的にかつ連続的に創作されたものである。「漢詩の大部分の如きは皆此断面的文学」といったように、漱石の漢詩では、「主観的断面」と「客観的断面」とがどのように詠われているのか。そして、「長き波の一部分を断片的に縫ひ拾ふもの」が「即ち吾人の心の曲線の絶えざる流波」といったように、連続的に詠われた作品群を連作として読む時に、前後の作品の間にどのような関係性が表われて、作品に表現される「快味」・「趣」が作品間にどのように変化するのか。一方では、個別作品として読む場合、個々の作品の中ではどのような内容が集約的に表現されているのか。そして、「断面的文学」といった形式が漱石の小説やエッセイの中では、またどのような形で用いられているのか。さらに、漢詩を挿入した文学作品には、漢詩がその作品にどのような芸術的効果を与えているのか。このような問題追究は、漱石漢文学の研究における未解決な問題を解けるための糸口になり、また、漢詩研究に新たな方向性を示すきっかけになると考える。